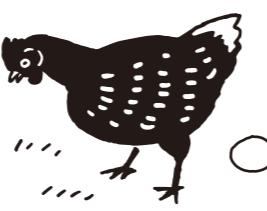




すぎな農園を手伝う丸山さん（写真右）も、田舎の環境や野菜作りに憧れて東京から移住してきた。写真やデザインの特技を生かして仕事をしながら野菜や米作りに勤しんでいる。



すぎな農園
竹渕進さん 智子さん

200羽の鶏とお引越し。

赤城山の
susono
で暮らす

2

今回取材したのは、養鶏業を中心とした兼業農家の竹渕夫妻。群馬県出身の夫・進さんは、妻の智子さんとともに、都内から旧倉渕村（現・高崎市倉渕町）へ移住し農業を始めたという竹渕さん。前橋へやつてきた。まずは、赤城山の南麓に位置する富士見町に畑と田んぼをしたのちに、前橋で新たに鶏舎を作り、200羽にもなる鶏や雛たちを運んできただという。

進「私たちが営むのは、養鶏場を中心とする『すぎな農園』という農場です。鶏舎は平飼いなので、床は土。その上で鶏たちが自由に動き回っています。のびのびストレスなく過ごしてもらうことで、おいしい卵を産んでもらえるんです。それと、自分でブレンドしている餌を与えるのも大切なこと。一般的な飼料はとうもろこしを主体にしてますが、それを一切使わずに国産のお米や麦で作っています。それゆえ、レモンイエローのような自然な色合いの黄身ができるあります。卵独特の臭みが弱くあっさりした風味だからか、子どもたちには特に人気ですね」

進「倉渕と比べると標高が半分ほど低くなりました。倉渕は標高600m以上だったので、農作物を作る環境としては非常に

もうひとつ、ここで実現したいことがあるんですよ。それは、農業体験や暮らしの体験。農業だけではなく、田舎の暮らしも含めて感じてもらえたと。名付けて『へのらたまの庭』」

智子「お客様」というより、一緒にやりましょう」というスタンスです。都会にいる人って、土に触れていないからとか、

その感覚がわからなかつたりすると思うんです。群馬の方が生活しやすいね、地方で暮らすのもいいね、って感じてくれる人を増やしたいです」

※お試し移住の場などで活用され、令和3年3月を以て終了

もとも、標高も、農業も変わった

進「鈴木さんは、彼らが『I R O R I 場』（※）というコミュニティ・スペースを始めたということで、そこで再会しました。以前は前橋の中心市街地で定期的に47年頃に建った、ザ・昭和という感じの見つかり、鶏舎を建てることができました」

智子「その後、私たちの住む家も見つかりました。富士見町に住んでいた友人の勧めで、空き家に半年くらい仮住まいさせてもらっていた頃、犬の散歩の途中で良さそうな空き家を見つけて、近隣の人々に所有者を紹介してもらいました。昭和47年頃に建った、ザ・昭和という感じの落ち着く家なんです」

頼もしい仲間の力を借りて 〈ノマド市〉再開

進「移住の際は、空いてる畠を探しては近隣の人へ聞いて回つたり、市の農業委員会に直接聞いて交渉しました。実際に移り住んで農業を始めた後、周りの人が声を掛けてくれるようになりました。移住コンシェルジュの鈴木さんもその一人。移住や地域生活のサポートをしていると

移住は自力と他力で

進「移住の際は、空いてる畠を探しては近隣の人へ聞いて回つたり、市の農業委員会に直接聞いて交渉しました。実際に移り住んで農業を始めた後、周りの人が声を掛けてくれるようになりました。移住コンシェルジュの鈴木さんもその一人。移住や地域生活のサポートをしていると

